

県営圃場整備事業(昭和54年度)

埋蔵文化財緊急発掘調査報告

# 岩間上山・宮間城

1980

長野県上伊那郡飯島町  
南信土地改良事務所



## 序

飯島町においては、昭和48年より県営は場整備事業が実施され、今年度は  
飯島地区第21・22区岩間地籍が実施されています。

当地籍は、中央アルプスの山麓にあたり、古くから集落が発達した地域で  
あり、文化財保護の立場から、飯島町遺跡調査会に依頼し調査を行ないまし  
た。

幸いにも南信七地改良事務所の御配意と、県教育委員会文化課の御指導の  
もとで、優秀なる調査団の先生方により大きな成果をあげられたことは、感  
謝にたえません。

出土品については、飯島町障嶽館に展示し一般の方々に見ていただく予定  
です。

調査報告書の刊行に当って関係各位に対し心から謝意を捧げる次第であります。

昭和55年3月20日

飯島町教育委員会教育長

熊崎安二

## 凡　　例

1. この調査は、県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査で、調査は南信土地改良事務所の委託により、飯島町が実施した。
2. 本調査は、昭和54年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述は、できるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
3. 本文の執筆は、友野良一、伊藤　修、中村正純が行なった。
4. 本報告書の編集は、主として飯島町遺跡調査会があたった。

### 〔発掘参加者名簿〕

畠越　智、堀越柳子、北沢　茂、北沢よ志、中原満秋、田中直敏、上山利男、横山定男、横山なるえ、羽生つぎ、羽生ゆき、堀越としあ、羽生保一、羽生愛子、羽生いさよ、中村美寿々、北原健三、小林昌義、北原さちこ、小林一歳、木下あけみ、唐沢辰雄、小林初子、小林かね、羽生かおる、中村正純



遺跡航空写真

## 発掘調査の経過

### 発掘調査に至るまで

県営は場整備事業飯島町区第21・22工区にある岩間上山、岩間城遺跡の埋蔵文化財緊急発掘調査を飯島町では、飯島町遺跡調査会に委託し実施した。

#### 〔飯島町遺跡調査会〕

会長	熊崎安二	(教育長)
理事	片桐修	(飯島町文化財調査委員)
	宮下静男	( )
	北原健三	( )
	桃沢匡行	( )
	松崎研定	( )
	中島坂雄	( )
	片桐佳彦	( )
	小林嘉男	( )
監事	畠越清志	(飯島町監査委員)
	中野武司	( )
幹事	吉沢内次	(飯島町教育委員会教育次長)
	米沢長実	( ) 係長)
	伊藤修	( ) 主事)
	宮下淑江	( ) 主事)

#### 〔発掘調査団〕

団長	友野良一	(日本考古学協会員)
調査員	伊藤修	(飯島町教育委員会主事)
	和田式夫	(長野県考古学会員)
調査補助員	中村正純	(飯島町)

### 調査日誌

岩間上山、岩間城遺跡の調査における主だった項目を拾ってみた。

- 調査は、調査地区全体に2m四方のグリットを設定し行なった。
- 両遺跡とも調査地区が広いえ、遺物包含層が深いため、ブルトーザーにより表土剥ぎを行なったうえで、遺構確認を行なった。
- 遺物について、主要なものは平面図出土点、出土高等を記録した。
- 遺構については、平面図の他にできる限り遺構断面の土層についても記録を行なった。

# 岩間上山

# 目 次

序

凡 例

発掘調査の経過

目 次

第Ⅰ章 遺跡の概観.....	2
第1節 位置 .....	2
第2節 地形・地質 .....	2
第Ⅱ章 遺構 .....	4
住居址 .....	4
土壤群 .....	18
第Ⅲ章 まとめ .....	20

## 挿 図 目 次

第1図 位置図(1:100000)	第2図 遺構配置図(1:600)
第3図 第1号住居址(1:80)	第4図 出土石器(1:4)
第5図 第2号住居址(1:60)	第6図 出土石器(1:8)
第7図 第3号住居址(1:80)	第8図 出土石器(1:8)
第9図 第4号住居址(1:60)	第10図 出土石器(1:2)
第11図 第5号住居址(1:60)	第12図 第6号住居址(1:80)
第13図 出土石器(1:8)	第14図 第7号住居址(1:60)
第15図 出土石器(1:8)	第16図 出土石器(1:8)
第17図 土壌群(A)(1:80)	

## 図 版 目 次

P 1 炉址	P 2 土器出土状況
P 3 第1号住居址	P 4 炉址
P 5 伏窓出土状況	P 6 第2号住居址
P 7 埋窓出土状況	P 8 第3号住居址
P 9 炉址	P 10 砕石出土状況
P 11 第4号住居址	P 12 炉址
P 13 石棒出土状況	P 14 埋窓出土状況
P 15 埋窓	P 16 第5号住居址
P 17 土器出土状況	P 18 第6号住居址
P 19 炉址	P 20 石棒出土状況
P 21 土器出土状況	P 22 第7号住居址
P 23 土壌群(A)全影	P 24 遺跡遠影
P 25 遺跡全影	

## 第1章 遺跡の概観

### 第1節 位置

岩間上山遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字飯島 3088-9 番地に所在する。

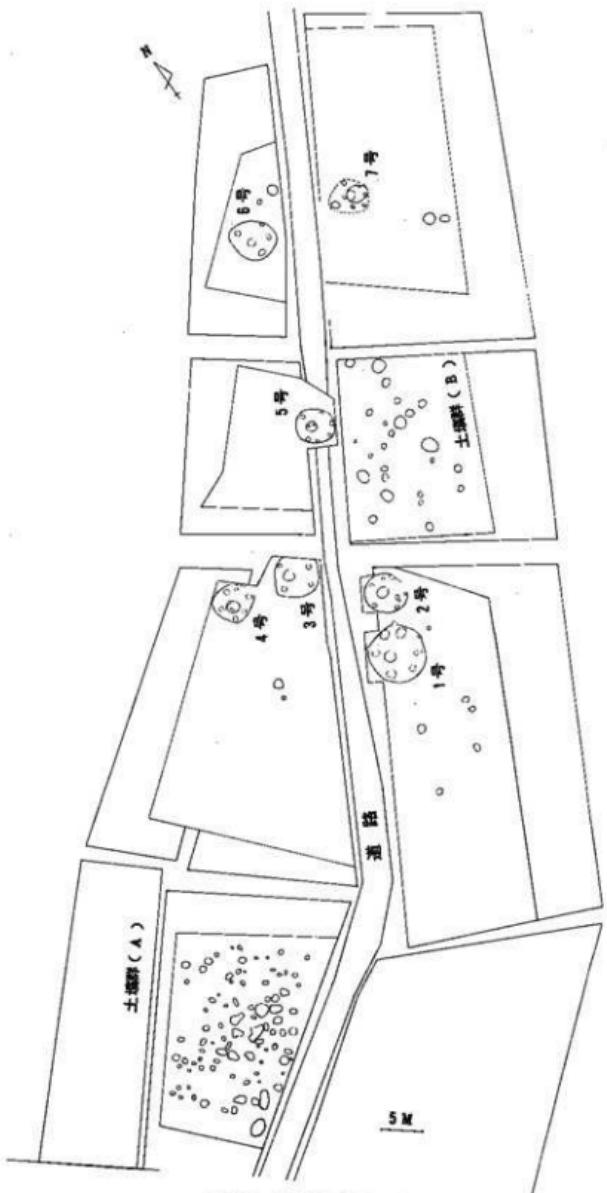
遺跡は中央アルプス山麓の台地上に位置する。遺跡に至るには、国鉄飯田線飯島駅で下車し、西へ約 2 kmほど歩いたところである。遺跡の中心で標高 769 m をはかる。

### 第2節 地形・地質

当遺跡は、中央アルプス南駒ヶ岳山麓の台地に位置する。遺跡は、与田切川により形成された扇状地の扇頂部にあり、西側の沢及び東側の段丘により南西より北東に走る幅約 100 m の舌状の台地となっている。調査地区的土層については、遺跡が明治時代以後の開田により擾乱されているため明らかでないが、疊層の基盤の上にローム層、黒褐色土層、耕作土層が堆積していると思われる。



第1図 位置図(1:100,000)

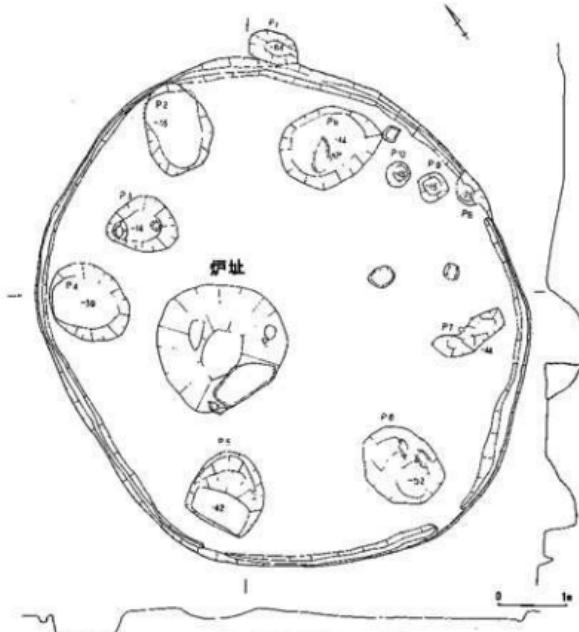


第2図 造構配設図(1:800)

## 第Ⅱ章 遺構

### 第1号住居址

本址位異	調査地区 中央、住居址郡南端						
ブラン	橢円形	規 模	南北—7.5m 東西—6.5m		主地方向 東—西		
壁 高	南20cm 東10cm	北10cm 西10cm	壁の状態	ゆるやかな傾斜で、基上部は開田によりこわされている。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦であるが柔らかい。 保存状態は良い。						
窓 横	全体にわたり造られている。3箇所で切れている。						
柱 穴	18箇所	主柱穴	P2, P4, P5, P6, P7, P11				
炉 の 位 置	中央やや西側	形 式	石窯炉であったと思われる	規 模	1.9m×1.8m円形		
壁 外 施 設 そ の 他	確認されない。						
遺物出土状況	遺物の出土は比較的少ない。縄文時代中期後半。						



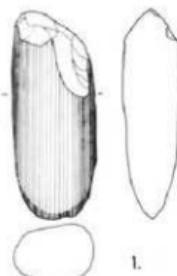
第3図 第1号住居址(1:80)



P 1 炉 址



P 2 土器出土状况



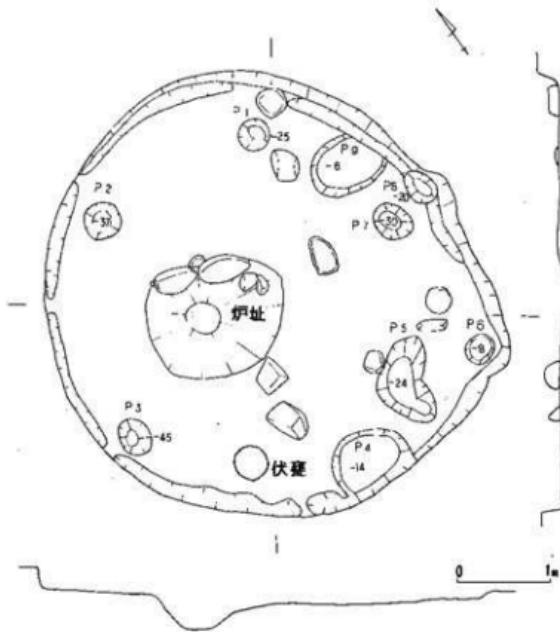
第4圖 出土石器(1:4)



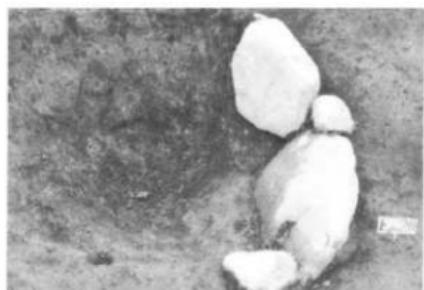
P 3 第1号住居址

第2号住居址

本 坂 位 置	調査地区中央 第1号住居址北側							
ブ ラ ン	円 形	規 模	南北—5 m 東西—4.5 m	主軸方向	東—西			
壁 高	南80cm 北25cm 東10cm 西20cm	壁の状態	僅か傾斜がみられる。					
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦であるが柔らかい。 床面上に20~40cmの自然石がみられる。							
周 溝	部分的に周溝がみられる。							
柱 穴	9箇所	主柱穴	P1, P2, P3, P4, P6, P8					
炉 の 位 置	中央や西側	形 式	石畳炉であったと思われる。	規 模	1.5m×1.8m 橋円形			
壁 外 構 設 そ の 他	確認されない。							
遺物出土状況	住居址南西壁付近に伏甕がみられる。縄文時代中期後半。							



第5図 第2号住居址 (1:80)



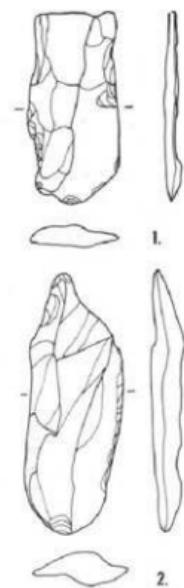
P 4 炉 址



P 5 伏甃出土状况



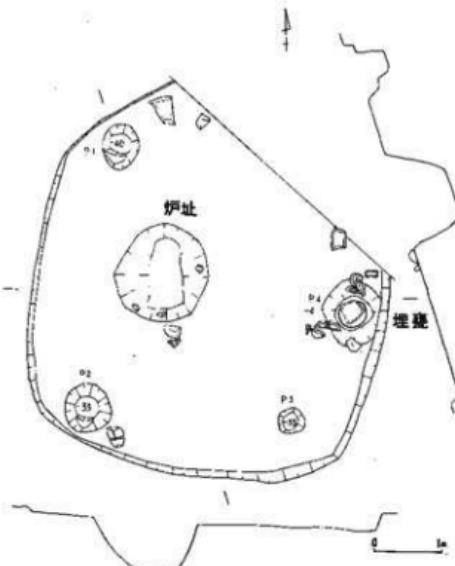
P 6 第 2 号住居址



第 6 図 出土石器 (1:3)

第3号住居址

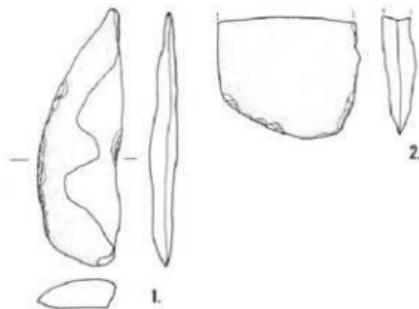
本 坂 位 置	調査地区中央、第1号、第2号住居址の西側						
ブ ラ ン	隅丸方形?	規 模	南北—5.7m 東西—5.1m	主軸方向	東—西		
壁 高	南15cm 東25cm	北15cm 西16cm	壁の状態	やや傾斜がみられる。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦であるが柔らかい。						
周 溝	認められない。						
柱 穴	8箇所	主柱穴	P <sub>1</sub> , P <sub>2</sub> , P <sub>3</sub>				
炉 の 位 置	中央やや西側	形 式	炉石と思われる石がみられる。	規 模	1.4m×1.4m 円 形		
壁 外 施 設 そ の 他	確認されない。住居址北東部は開田により破壊されている。						
遺物出土状況	P4内に埋甕がみられる。遺物の出土は多い。縄文時代中期後半。						



第7図 第3号住居址(1:80)



P 7 埋藏出土状況



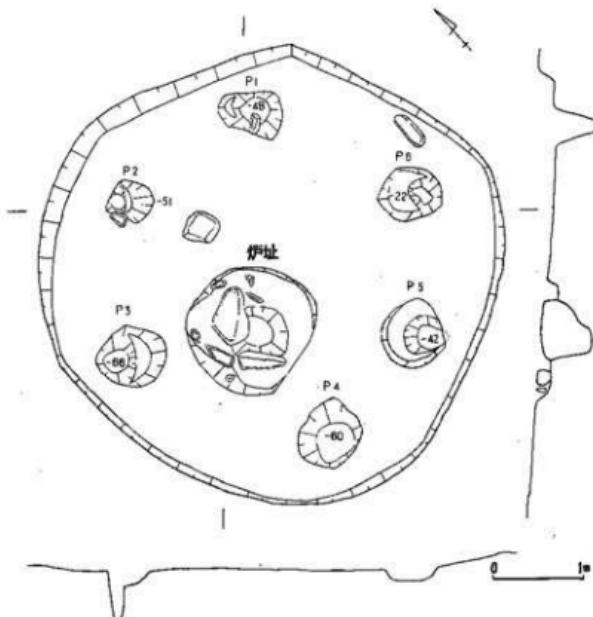
第8図 出土石器(1:3)



P 8 第3号住居址

第4号住居址

本 坂 位 置	調査地区中央西側、第3号住居址西側						
ブ ラ ン	円 形	規 模	南北— 5 m 東西— 4.8 m	主軸方向	東- 西		
壁 高	南 5 cm 東 5 cm	北 20 cm 西 5 cm	壁の状態	北東側を除き、大部分が開田により上部を破壊されている。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦であるが柔らかい。						
馬 溝	認められない						
柱 穴	6箇所	主柱穴	P <sub>1</sub> , P <sub>2</sub> , P <sub>3</sub> , P <sub>4</sub> , P <sub>5</sub> , P <sub>6</sub>				
炉 の 位 置	中央やや西側	形 式	石函炉	規 模	14m×1.8m 円 形		
壁 外 施 設 そ の 他	認められない。						
遺 物 出 土 状 況	遺物の出土は多い。縄文時代中期後半。						



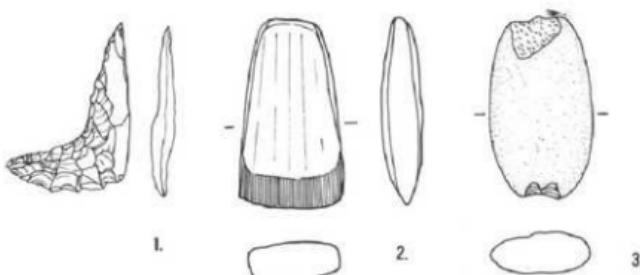
第9図 第4号住居址 (1:60)



P 9 炉 址



P 10 砧石出土状況



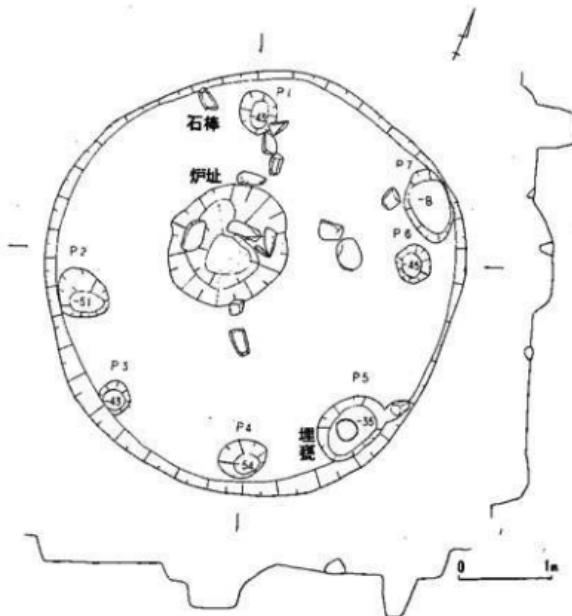
第 10 図 出土石器 (1 : 2)



P 11 第 4 号住居址

## 第5号住居址

調査地区中央北側					
本 坂 位 置	内 形	規 模	南北 - 4.6 m 東西 - 4.5 m	主軸方向	東・西
ブ ラ ン	円 形	規 模	南北 - 4.6 m 東西 - 4.5 m	主軸方向	東・西
壁 高	南 40 cm 東 85 cm	北 15 cm 西 25 cm	壁の状態	やや傾斜がみられる。	保存状況は良い。
床	ローム層を掘り込んで造られている。	床面は、凹凸がみられ、柔らかい。			
周 溝	認められない。				
柱 穴	7箇所	主柱穴	P <sub>1</sub> , P <sub>2</sub> , P <sub>4</sub> , P <sub>6</sub>		
炉 の 位 置	中央やや北側	形 式	炉石と思われる石がみられる。	規 模	1.4m×1.2m 總円形
壁 外 施 設	認められない。				
そ の 他					
遺物出土状況	P <sub>5</sub> 内に埋甕がみられる。遺物の出土が多い。	縄文時代中期後半。			



第11図 第5号住居址(1:60)



P 12 炉 址



P 13 石棒出土状况



P 14 垦荒出土状况



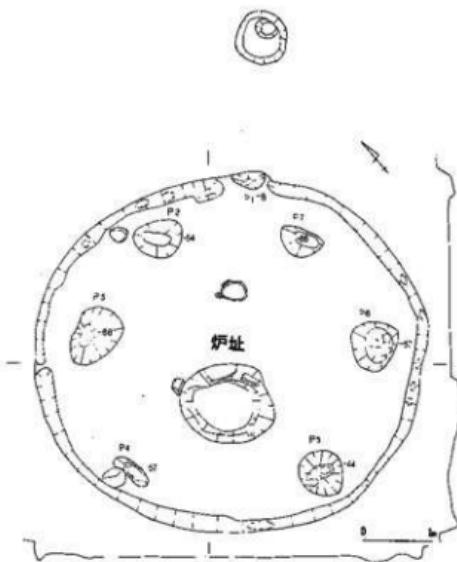
P 15 垦 荒



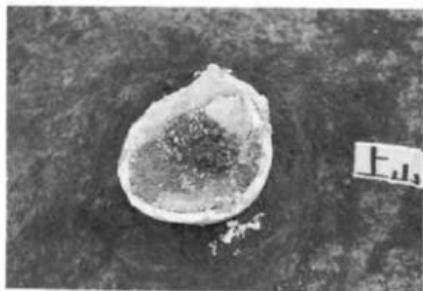
P 16 第 5 号住居址

第6号住居址

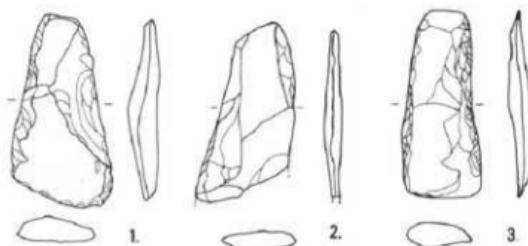
本 位 置	調査地区北側、第5号住居址北側							
プ ラ ン	円 形	規 模	南北—5.4 m 東西—5.4 m	主軸方向	東—西			
壁 高	南25cm 北25cm 東17cm 西25cm	壁の状態	大部分が開田により上部を破壊されている。					
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦であるが柔らかい。							
周 溝	全体にわたり溝が巡らされている。							
柱 穴	7箇所	主柱穴	P <sub>2</sub> , P <sub>3</sub> , P <sub>4</sub> , P <sub>5</sub> , P <sub>6</sub> , P <sub>7</sub>					
炉 の 位 置	中央やや南西側	形 式	か石と思われる石がみられる。	規 模	1.4m×1.1m 楠円形			
壁 外 施 設 そ の 他	認められない。							
遺物出土状況	開田により破壊されており、遺物の出土は少ない。縄文時代中期後半。							



第12図 第6号住居址(1:80)



P 17 土器出土状況



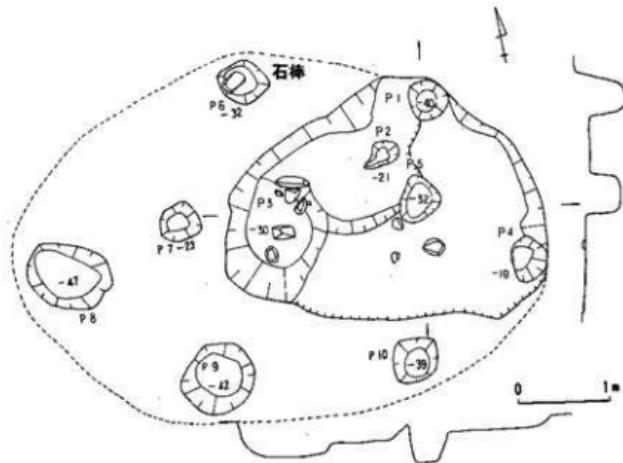
第13図 出土石器(1:3)



P 18 第6号住居址

第7号住居址

本 坂 位 置		調査地区北側								
ブ ラ ン	橢円形?	規 模	南北— 東西— m m		主軸方向	不 明				
壁 高	南 東 cm 北 西 cm	壁の状態	開田により大部分が破壊されている。							
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は西側は平坦であり、東側は浅い窪みとなっている。									
周 溝	認められない。									
柱 穴	6箇所	主柱内	P <sub>1</sub> , P <sub>4</sub> , P <sub>6</sub> , P <sub>8</sub> , P <sub>9</sub> , P <sub>10</sub>							
炉 の 位 置	中央	形 式	炉石と思われる石かみられる。	規 模	1.5m×1.2 橢円形					
埋 外 施 設 そ の 他	開田により破壊され不明									
遺 物 出 土 状 況	開田により破壊されており遺物の出土は少ない。縄文時代中期後半。									



第14図 第7号住居址(1:60)



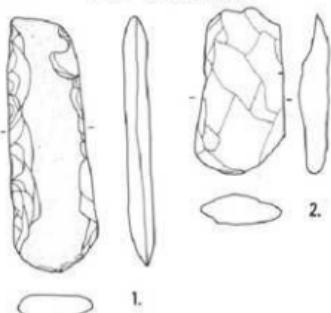
P 19 炉 址



P 20 石棒出土状况



P 21 土器出土状况



第 15 図 出土石器 (1:3)



P 22 第 7 号住居址

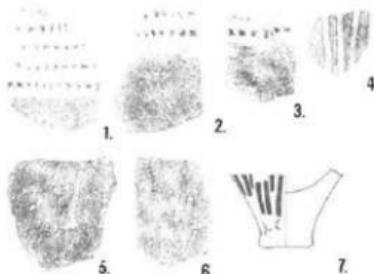
## 土壤群

調査地区の南西に、20 cm～150 cmの円形、橢円形の土壇が89ヶ所みられる。土壇はいずれもローム層を10 cm～80 cmほど掘り込んで造られており、大形の土壇は比較的底部が平坦なものが多い。またP<sub>28</sub>、P<sub>75</sub>、P<sub>80</sub>のように土壇内に石がみられるものもある。土壇の付近には僅かに焼土もみられる。

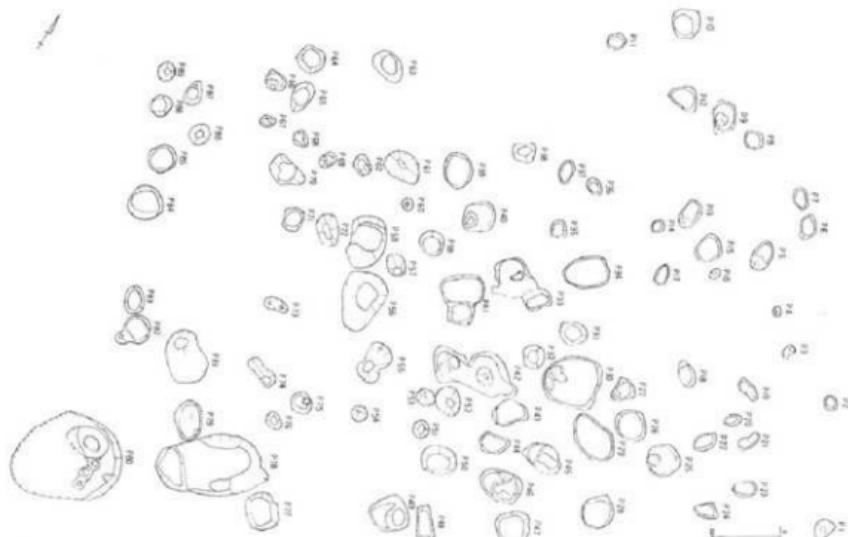
土壇内、付近からの出土遺物は、土器片が大部分であり、縄文時代早期末である。



P 23 土壇群(A)全影



第16図 出土土器(1:3)



第17図 土壇群(A)(1:80)



P 24 遺跡遠影



P 25 遺跡全影

## 第Ⅲ章 まとめ

上山遺跡は、南駒ヶ岳に源を発する与田切川の古い扇状地の東端に当る段丘上に位置する。遺跡の西方は、南駒ヶ岳の前山横根山より流れる中小河川が作った上山の複合扇状地の湿地帯がひろがる、自然環境に適まれた場所に占地している遺跡である。

この遺跡は明治～大正時代にかけて開拓が行われた。そのため遺跡の大方が破壊された疑いがもたれていた。今回の調査はその破壊からのがれた箇所の発掘調査ということになる。

調査の結果、縄文早期末（入海式）の土壙 89 基、縄文中期後業の住居址 7 軒、縄文中期後業の土壙群 24 基が発見された。

1. 縄文早期末の土壙群は、上山遺跡でも一番乾燥している高い場所に位置している。発掘した面積は約 750 m<sup>2</sup>で、確認した土壙は 89 基、そのうち遺物の発見された土壙は数基のみで他の土壙からは遺物は発見されなかつた。このことは土壙の使用上の性格に関係するものかもしれない。今回の調査では残念ながらその究明にまで至らなかつたが、今後に向けて問題を提起しておきたい。上伊那地方において、縄文早期末、柏原・入海・塙谷・天神山等東海系の遺物を出土する遺跡がここ 2～3 年の間に調査された。その主な遺跡としては、同町飯島町七久保カゴ田遺跡、宮田村南割、下の段遺跡、高遠町宮ノ原遺跡等があげられる。これ等の遺跡にも上山遺跡と同様な土壙群が住居址に伴つて発見されている。このことは、縄文早期末の生業や埋葬等の状態を知る上で重要な問題としてとらえていきたい。

2. 縄文中期の住居址について。台地の中央部の比較的尾根ぞいの高い部分に、2 軒を 1 単位に直列に分布しているところより集落の形態は直列形と考えられる。

住居址の形態は、円形が 2・4・5・6 号住、椭円形が 1・7 号住、隅丸方形が 3 号住居址であり、円形が多い。

柱穴は、4 柱穴が 3 号住、6 柱穴以上が 1・2・3・4・5・6・7 号住居址である。この中には、4 柱穴が含まれている可能性があるが、住居内のピット及び他の掘込みとの区別が困難な面があることから、こういう結果となつた。このことは住居址の広さと、建築材料とも関連をもつのではないか。これも今後住居址の床面積と建材との研究の一つとしていきたい。

炉址。全住居址の炉石が抜き去られている。

石棒。今回発見された石棒は住居址内から発見されたものである。出土した住居址は 5・7 号住居址である。2 例とも発見された位置は北側壁付近である。5 号住は石棒が単独で発見された。7 号住居址は柱穴にそった場所から発見された。長崎元広氏は、石棒・立石・石壇などの祭祀施設をもつ住居址は、司祭者と呪術師を含む一般家族の住まいであり、かつ、集落内の主だった成員が集まって行なう、集落全体にかかる共同祭祀の場でもあったこと、石棒祭祀の住居は、成人男子といった特定の年令・性別集団の成員にかかる家屋と考察した。これは、従来竪穴個々の個別的な祭祀と一面的にしか解釈されなかつた竪穴祭祀が、共同祭式・個別祭式・特定祭式という多面的な祭式としてとらえられたのである。これは実に重要な指摘であると、堀越正行氏は評価している。

埋葬。埋葬は 2・3・5 号住居址に検出された。2・5 号は主軸の方向、3 号は東側に位置している。埋葬の時期は曾利Ⅰ式に比定されるものであろう。

遺物。出土した土器は曾利Ⅰ～Ⅱ式併行のものが主体である。従って本遺跡は曾利Ⅰ式期の集落と考えられる。

終りにあたり、地元の皆様、飯島町教育委員会、南信土地改良事務所、県教育委員会の皆様に心から御礼を申し上げる次第であります。

（調査団長 友野良一）

# 岩間城

## 目 次

第Ⅰ章 遺跡の概観 .....	2
第1節 位置 .....	2
第2節 地形・地質 .....	2
第3節 歴史的環境 .....	2
第Ⅱ章 遺 標 .....	5
住居址 .....	11
土壤 .....	25
堀 .....	26
縫経塚 .....	26
第Ⅲ章 まとめ .....	29

## 挿 図 目 次

第1図 位図図(1:100000)	遺構配置図(1:800)
第3図 第1号址(1:60)	出土遺物(1:8)
第5図 第2号址(1:60)	A地区出土陶器(1:8)
第7図 第3号址(1:60)	出土陶器(1:8)
第9図 第4号住居址(1:80)	第10図 出土遺物(1:3)
第11図 第5号住居址(1:60)	第12図 出土土器(1:2)
第13図 第6号住居址(1:80)	第14図 出土土器(1:8)
第15図 出土石器(1:3)	第16図 第7号住居址(1:60)
第17図 出土遺物(1:2)	第18図 第8号住居址(1:60)
第19図 出土遺物(1:3)	第20図 第9号住居址(1:60)
第21図 出土土器(1:2)	第22図 出土須恵器(1:2)
第23図 第10号住居址(1:60)	第24図 第11号住居址(1:80)
第25図 A地区土壤(1:80)	第26図 縫経塚(1:80)
第27図 堀(1:80)	

## 図 版 目 次

P 1 出土遺物	P 2 第1号址
P 3 出土陶器	P 4 出土陶器
P 5 第8号址	P 6 出土遺物
P 7 第4号住居址	P 8 第5号住居址
P 9 埋甕	P 10 第6号住居址
P 11 埋甕, 石鍤	P 12 第7号住居址
P 13 第8号住居址	P 14 出土土器
P 15 カマド	P 16 A地区出土陶器
P 17 A地区	P 18 C地区
P 19 A地区土壤	P 20 縫経塚断面
P 21 調査風影	P 22 五輪塔
P 23 堀(北側より写す)	P 24 堀(南側より写す)

# 第Ⅰ章 遺跡の概観

## 第1節 位 置

岩間城遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字飯島 2865-3番地に所在する。

遺跡は中央アルプス山麓の扇状地に位置する。遺跡に至るには国鉄飯田線飯島駅で下車し、北西の方向へ2kmほど歩いたところである。遺跡の中心で標高708mをはかる。

## 第2節 地形・地質

当遺跡は、中央アルプス山麓の台地に位置する。遺跡の北側と南側が東西にはしる崖地となっており、それにより遺跡一帯は舌状の台地となっている。

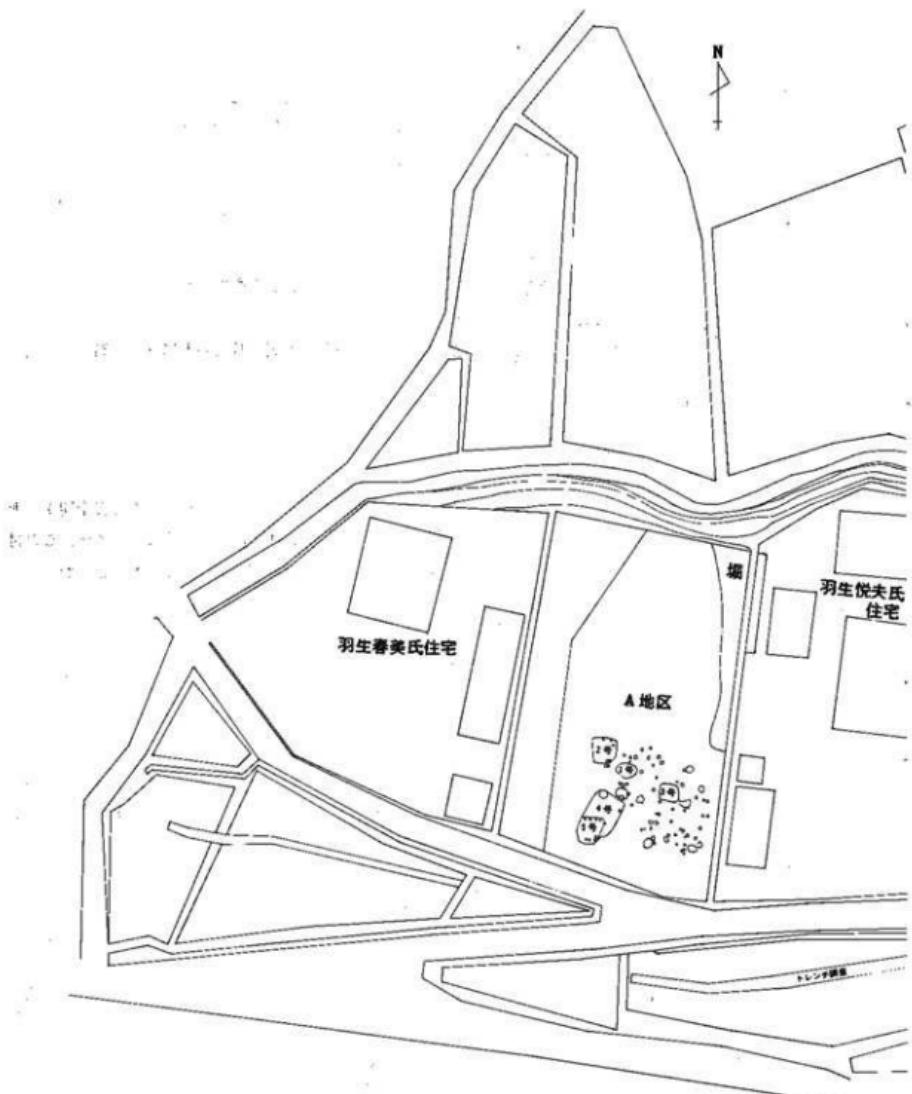
調査地区的土層については、遺跡一帯が現在水田となっており、疊層の基盤の上にローム層、黒褐色土層が堆積し表面は耕作土となっている。

## 第3節 歴史的環境

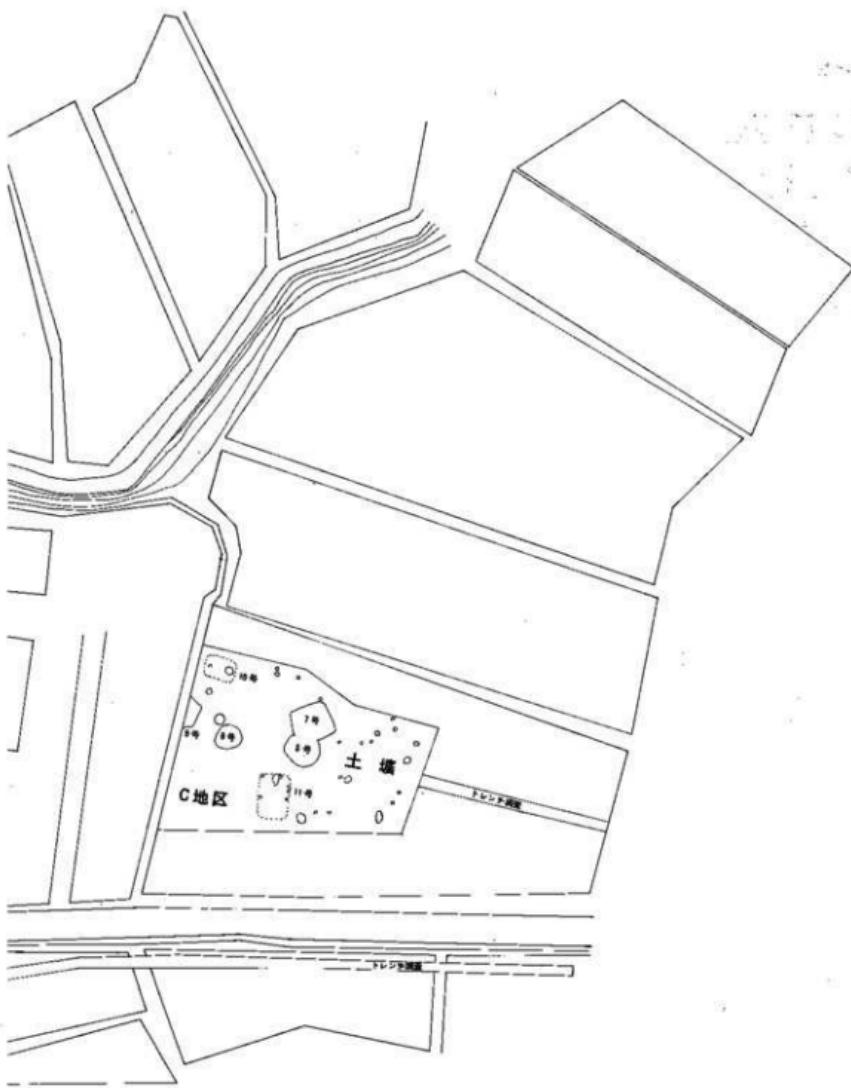
当該遺跡の立地する岩間耕地一帯は、古くより集落が発達した地域であり、山溝遺跡（縄文中期）、上山遺跡（同）、うどん坂第2遺跡（縄文晩期）等の多くの遺跡が存在する。また中世においては、この付近一帯を支配した飯島氏に關係のある岩間氏が領を構え、低地を中心開田を行なったものと思われる。



第1図 位置図(1:100,000)



第2図 造構配図

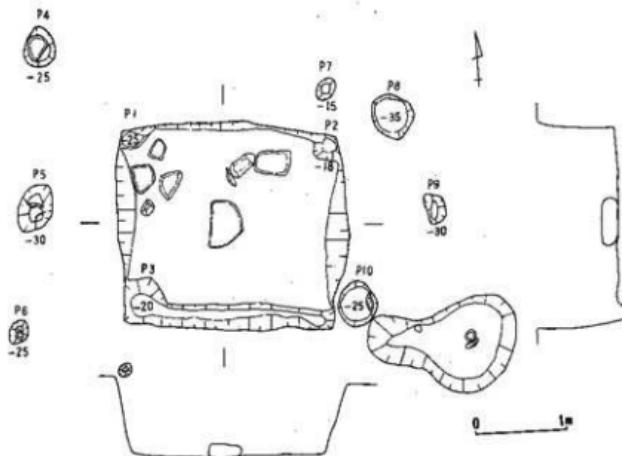


( 1 : 800 )

## 第Ⅱ章 遺構

### 第1号址

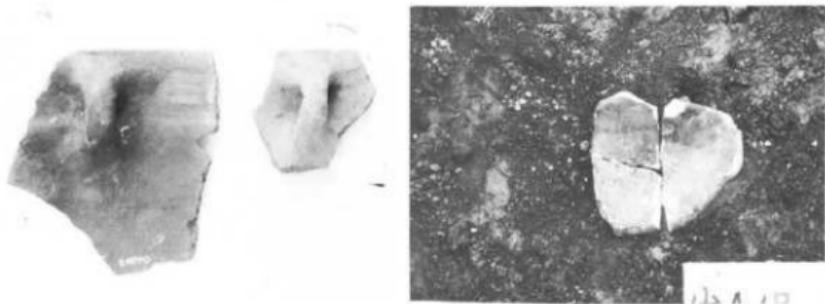
本址位置	A地区中央南側、土壤群中央						
プラン	方 形	規 模	南北— 2.2 m 東西— 2.5 m	主軸方向	東—西		
壁 高	南 90 cm 東 80 cm	北 85 cm 西 80 cm	壁の状態	僅か傾斜がみられる。 東壁、西壁は中央付近がふくらんでいる。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は水平であるが凹凸がみられる。						
周 構	南側壁にみられる。						
柱 穴	10箇所	主柱内	P <sub>1</sub> , P <sub>2</sub> , P <sub>3</sub>				
炉 の 位 置	—	形 式	—	規 模	m × m		
上擴壁外施設	柱穴P <sub>4</sub> ～P <sub>10</sub>						
その 他							
遺物出土状況	遺物の出土は少ない。陶器、内耳土器、古錢等が出土。						



第3図 第1号址(1:60)



第4図 出土遺物(1:3)



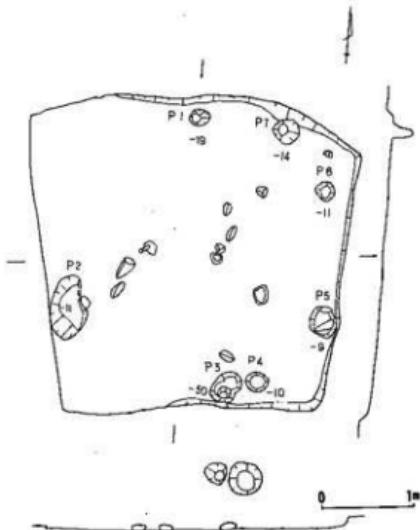
P 1 出土遺物



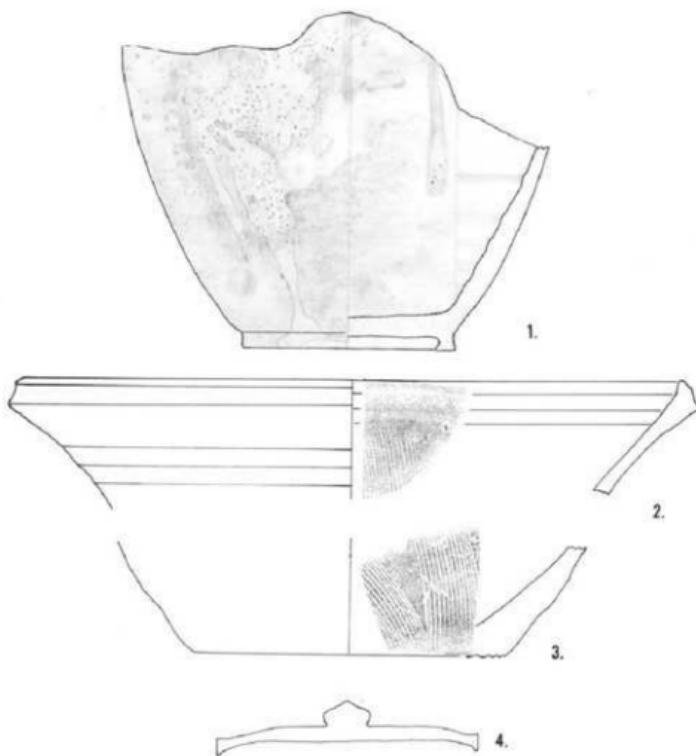
P 2 第1号址

第2号址

本址位置	A地区中央西側、土壤壁西側						
プラン	方 形	規 模	南北— 3.3 m 東西— 3.3 m	主軸方向			
壁 高	南 10 cm 東 10 cm	北 10 cm 西 5 cm	壁の状態	開田により上部が破壊されており、僅かに塗が残っている。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦であり、柔らかく 10 cm～20 cm の自然石がみられる。						
用 溝	認められない。						
柱 穴	7箇所	主柱内	P <sub>1</sub> , P <sub>2</sub> , P <sub>3</sub> , P <sub>5</sub> , P <sub>6</sub>				
炉の位置	——	形 式	————	規 模	m × m		
土壤壁外施設 そ の 他	認められない。						
遺物出土状況	遺物の出土は少ない。陶器、砥石等が出土。						



第5図 第2号址(1:60)



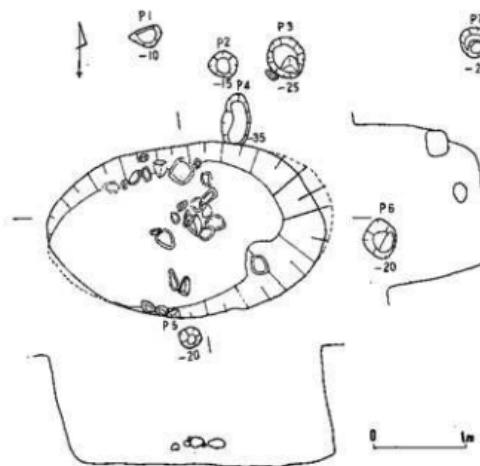
第6図 A地区出土陶器(1:3)



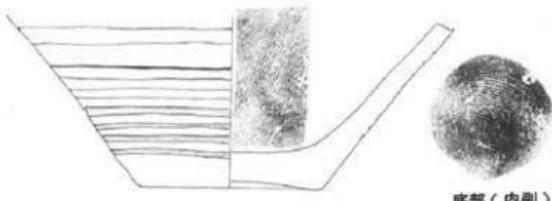
P3 A地区出土陶器(1:3)

第3号址

本址位置	A地区中央南、第2号址東側					
プラン	椭円形	規模	南北—1.9m 東西—8m	主軸方向		
壁高	南110cm 北180cm 東180cm 西120cm	壁の状態	北側、東側壁は傾斜がみられる。 南西側壁は直又は袋状となっている。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。覆土下層に自然石がみられる。 床面は平坦であるが柔らかい。					
馬溝	認められない。					
柱穴	箇所	主柱穴				
炉の位置		形式		規模 m×m		
土壤壁外施設その他	北側、南側にピットがみられる。					
遺物出土状況	遺物の出土は少ない。陶器、内耳土器が出土。					



第7図 第3号址(1:60)



第8図 出土陶器(1:3)



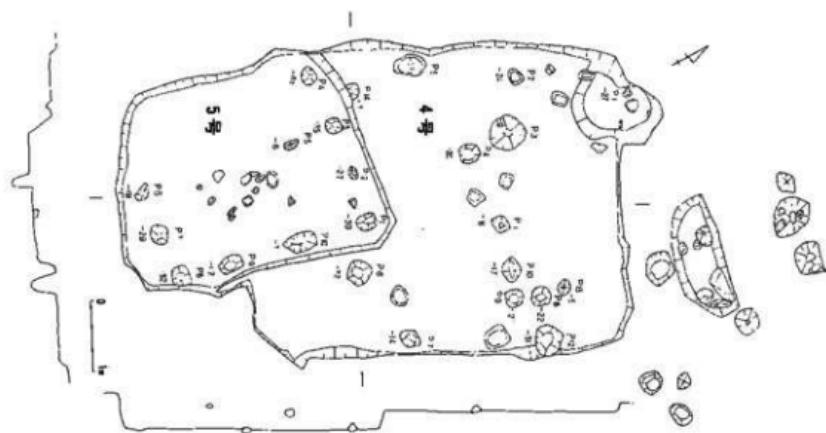
P 4 出土陶器



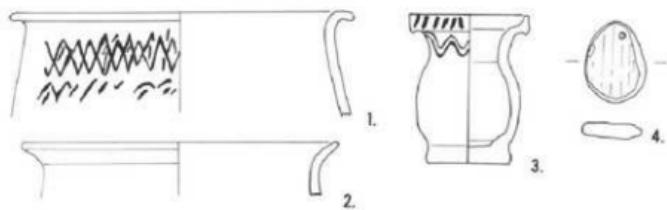
P 5 第3号址

第4号住居址

本 坂 位 置	A地区中央南西、第5号住居址に接続されている。			
ブ ラ ン	長 方 形	規 模	南北—5.8 m 東西—4.5 m	主軸方向 南—北
壁 高	南10 cm 東15 cm	北10 cm 西10 cm	壁の状態	開田により上部が破壊されており、僅かに壁が残っている。
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は比較的平坦であり、柔らかい。中央やや北側にピットが多くみられる。			
周 溝	認められない。			
柱 穴	4箇所	主柱穴	P <sub>2</sub> , P <sub>5</sub> , P <sub>7</sub> , P <sub>12</sub>	
炉 の 位 置		形 式		規 模
土壤壁外施設 そ の 他	住居址の北東側にピットが多くみられる。			
遺物出土状況	遺物の出土は少ない。弥生時代後期。			



第9図 第4号住居址(1:80)



第10図 出土遺物(1:3)



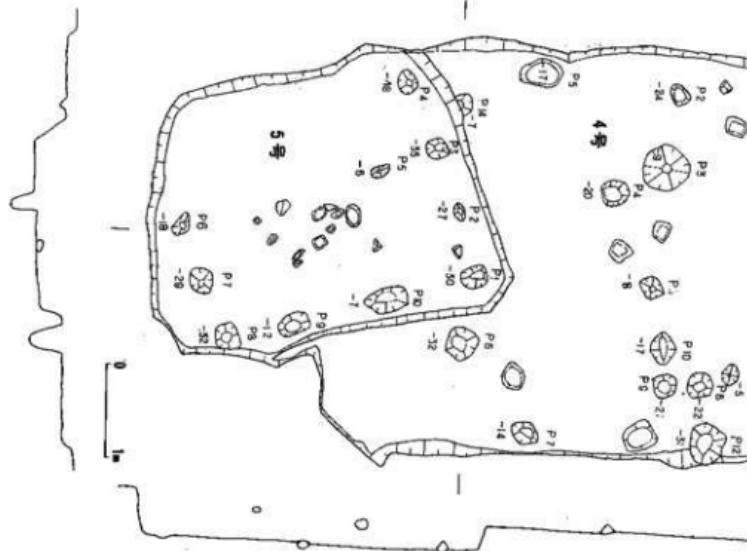
P6 出土遺物

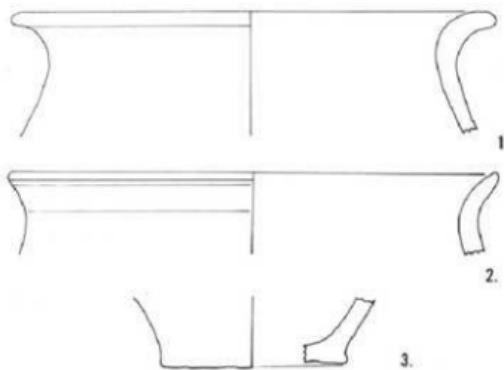


P7 第4号住居址

### 第5号住居址

本 坂 位 置	A地区中央南西、第4号住居址を被覆している。				
ブ ラ ン	長 方 形	規 模	南北— 8.7 m 東西— 2.9 m	主軸方向	南—北
壁 高	南 50 cm 東 40 cm	北 40 cm 西 40 cm	壁の状態	開口により上部が破壊されている。 壁は直に近く狭い。	
床	ローム層を深く掘り込んで造られている。床面は平坦でかたい。 床面中央部に拳大の石がみられる。				
周 溝	認められない。				
柱 穴	9箇所	主柱内	P <sub>1</sub> , P <sub>4</sub> , P <sub>8</sub>		
炉 の 位 置		形 式		規 模	m × m
土壤壁外施設そ の 他	認められない。				
遺物出土状況	遺物の出土は少ない。弥生時代後期				





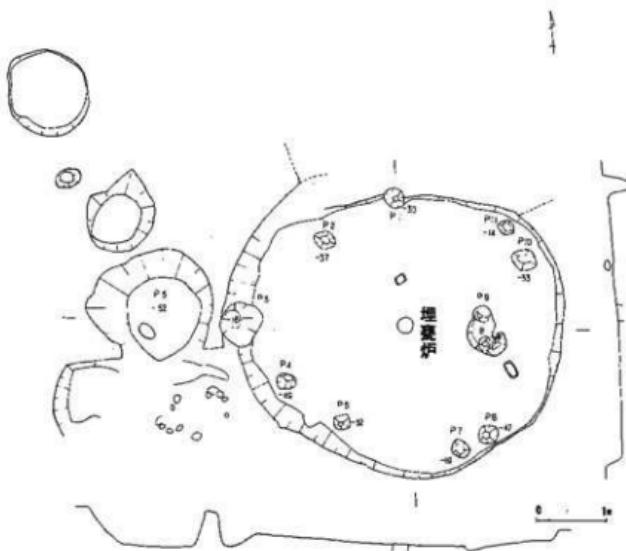
第12図 出土土器(1:2)



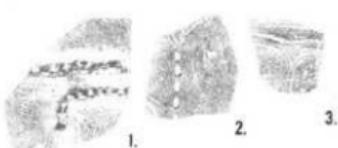
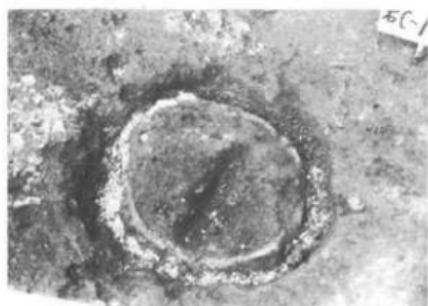
P 8 第5号住居址

## 第6号住居址

本 坂 位 置	C地区中央部、第7号住居址に接する。				
ブ ラ ン	椭円形	規 模	南北- 4 m 東西- 4.8 m	主軸方向	東- 西
壁 高	南 25 cm	北 10 cm 東 15 cm	西 20 cm	壁の状態	浅く、傾斜がみられる。第7号住居址により北側壁が壊されており明らかでない。
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦でかたい。				
周 溝	認められない。				
柱 穴	8箇所	主柱穴	P <sub>2</sub> , P <sub>4</sub> , P <sub>8</sub> , P <sub>10</sub>		
炉 の 位 置	中央部	形 式	堆塗炉	規 模	0.25m×0.25m 円形
土壤等外施設 そ の 他	住居址西側に大形の土壤がみらる。				
遺物出土状況	遺物の出土は少ない。縄文時代中期初頭。				



第13図 第6号住居址(1:80)



第14図 出土土器(1:3)  
P 9 埋 窯 炉



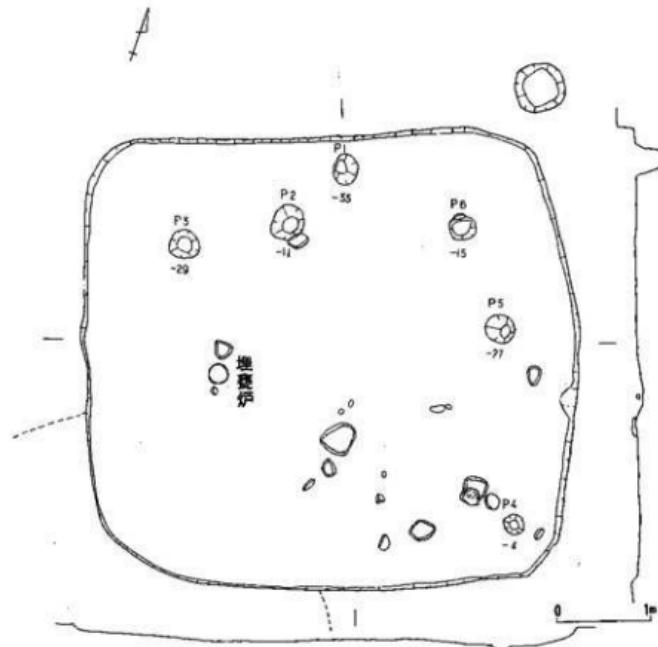
第15図 出土石器(1:3)



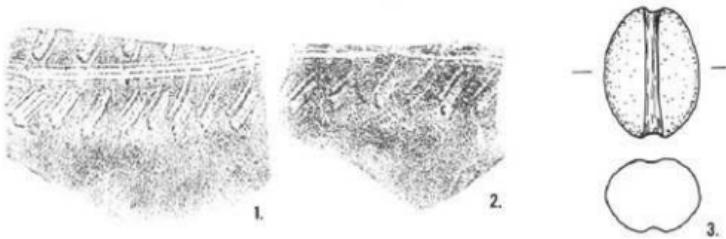
P 10 第6号住居址

第7号住居址

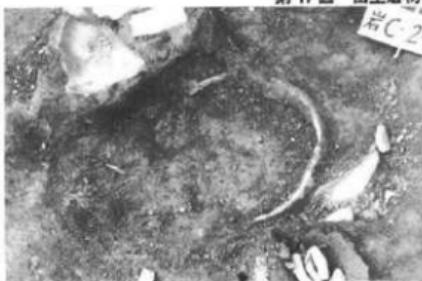
本 坂 位 置	C地区中央部、第6号住居址に接する。						
ブ ラ ン	隅丸方形	規 模	南北—4.9 m 東西—5.4 m	主軸方向	東—西		
壁 高	南 10 cm 東 10 cm	北 20 cm 西 10 cm	壁の状態	開田により壁の上部が破壊されている。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。平坦でかたい。						
周 満	認められない。						
柱 穴	6箇所	主柱穴	4本主柱穴と思われる。P <sub>3</sub> , P <sub>4</sub> , P <sub>5</sub>				
炉 の 位 置	中央やや西側	形 式	埋甕炉	規 模	0.2m×0.2m 円形		
土壤壁外施設 そ の 他	住居址の北東にピットが1箇所認められるのみである。						
遺物出土状況	遺物の出土は少ない。土器片、石鏟が出土。弥生時代後期。						



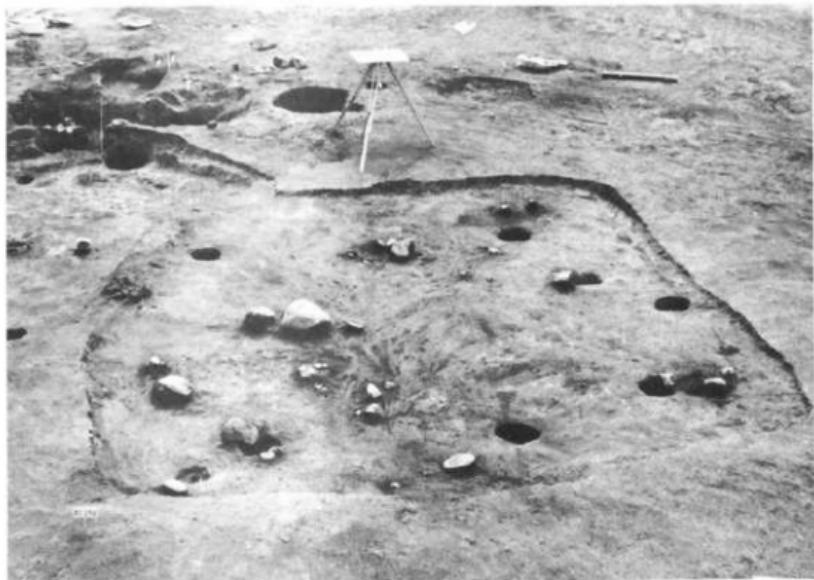
第16図 第7号住居址(1:80)



第17図 出土遺物(1:2)



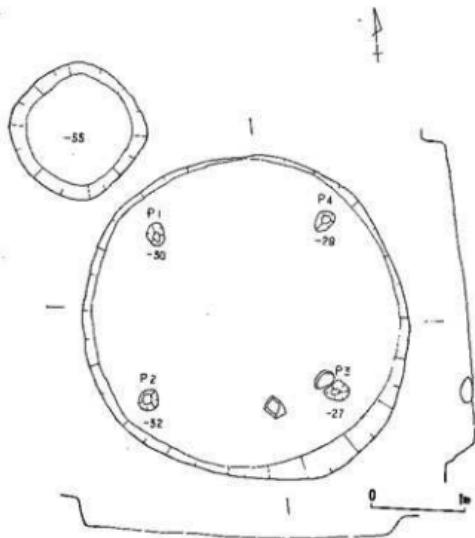
P 11 埋甕炉、石罐



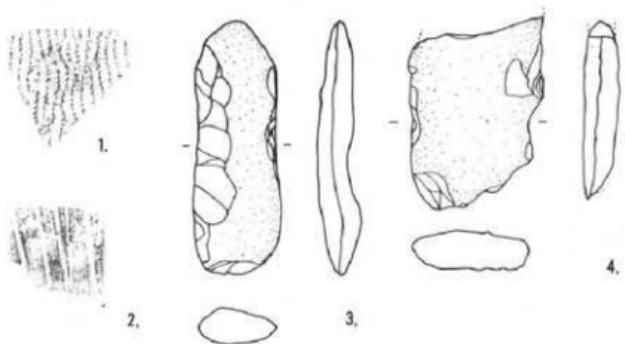
P 12 第7号住居址

第8号住居址

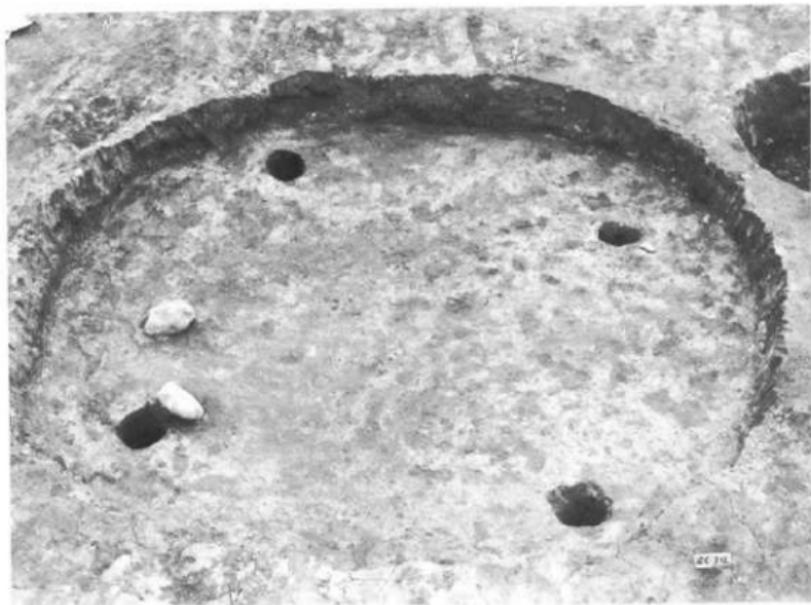
本址位置 C地区、中央や西側					
プラン	円形	規模	南北—3.5m 東西—3.5m	主軸方向	
壁高	南80cm 北25cm 東25cm 西80cm	壁の状態	北側は直にちかく、南側は傾斜がみられる。		
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦でかたい。				
周溝	認められない。				
柱穴	4箇所	主柱穴	4本主柱穴。P <sub>1</sub> ～P <sub>4</sub>		
炉の位置		形式		規模	m×m
土壤壁外施設	住居址北側に円形の大形の土壠がみられる。				
その他の遺物出土状況	遺物の出土は少ない。				



第18図 第8号住居址(1:60)



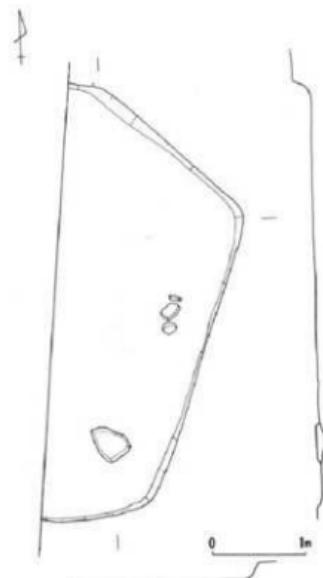
第19図 出土遺物(1:3)



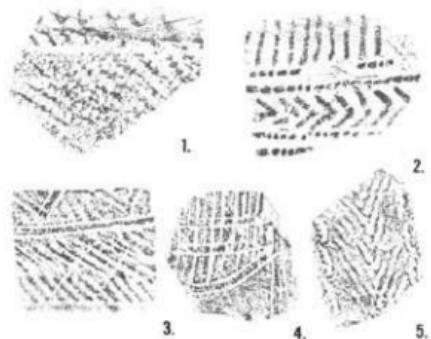
P 13 第8号住居址

第9号住居址

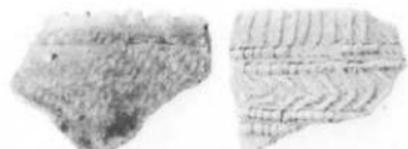
本址位置	C地区、西側						
プラン	不明	規模	南北— 東西— m m	主軸方向			
壁高	南10cm 東cm	北20cm 西cm	壁の状態	開田により上部が破壊されており、僅かに壁が残っている。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。西側半分は地区外のため調査できない。 東側は比較的平坦である。						
周溝	東側半分には認められない。						
柱穴	主柱穴						
炉の位置	形 式		規 模		m × m		
土壤壁外施設 その他の							
遺物出土状況	土器片のみ出土、縄文時代前中期、中期初頭の土器片。						



第20図 第9号住居址 (1:60)



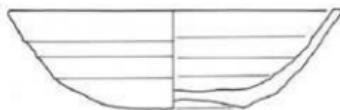
第21図 出土土器 (1:2)



P 14 出土土器

第 10 号住居址

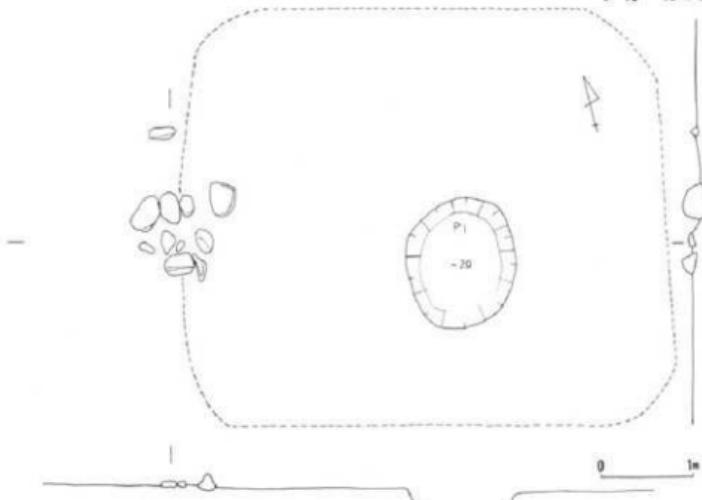
本 坂 位 置		調査地区西側				
ブ ラ ン	( 溝丸方形 )	規 模	南北— 東西—	m m	主軸方向	東—西
壁 高	南 cm 東 cm	北 cm 西 cm	壁の状態	開田により壁は削り取られている。		
床	開田により破壊されており明らかでない。					
周 溝						
柱 穴		主柱穴				
カマドの位置	西壁中央	形 式		規 模	m × m	
土 壤 壁 外 施 設 そ の 他	住居址中央部に大形の土壤がみられる。					
遺 物 出 土 状 況	須恵器、土師器が出土。					



第 22 図 出土須恵器



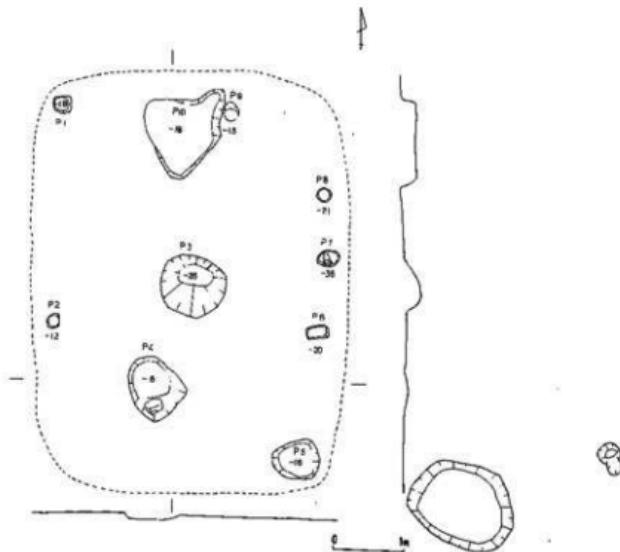
P 15 カマド



第 23 図 第 10 号住居址 ( 1 : 60 )

第 11 号住居址

本 址 位 置		調査地区中央南側								
ブ ラ ン ( 段丸方形 )		規 模	南北— 東西— m m		主軸方向	南—北				
壁 高 南 cm 東 cm		北 cm 西 cm	壁の状態		開田により壁は削り取られている。					
床		開田により破壊されており明らかでない。								
周 溝										
柱 穴 6箇所		主柱穴	P <sub>1</sub> , P <sub>5</sub>							
炉 の 位 置		形 式			規 模	m × m				
土壌壁外施設 そ の 他		住居址の南東に大形の土壠がみられる。								
遺物出土状況										



第 24 図 第 11 号住居址 ( 1 : 80 )



P 16 A 地区出土陶器



P 17 A 地 区



P 18 C 地 区

## 土 壤

A・C両地区に土壤が確認された。

A地区は、調査地区的南東に20～150cmの円形、橢円形の土壤が約60ヶ所みられる。土壤のなかには柱穴と思われるものもあるが、今回の調査では確認できなかった。

遺物は土壤付近から、陶器、内耳土器等出土した。

C地区東側に約20ヶ所みられる。土壤内及び付近からの遺物の出土は少なく、縄文時代中期後半の土器片、打製石斧等出土した。



P 19 A地区土壤



## 塙

調査地区の中央部に、南北の空掘が確認された。塙の南側は調査地区外へのびているために全体の規模は明らかではないが、北側は城址の北側の東西にのびる低地まで続いている。

塙の底部は比較的平坦であり、10～30cmの礫がみられる。

塙の底部、あるいは下層からは陶器片が十数点出土した。

## 礫経塙

岩間城遺跡の北側約200mの低地に位置する。付近は以前五輪塔（写真・岩間氏の墓と伝えられる）があったことから、五輪塙と呼ばれている。

礫経塙は、現在水田の土手となっており、塙の上部は破壊されている。塙は5cm～20cmの自然石170個で構成されており、文字の跡のみられるものもある。



P 20 磯経塙断面



P 21 調査風景



P 22 五輪塔



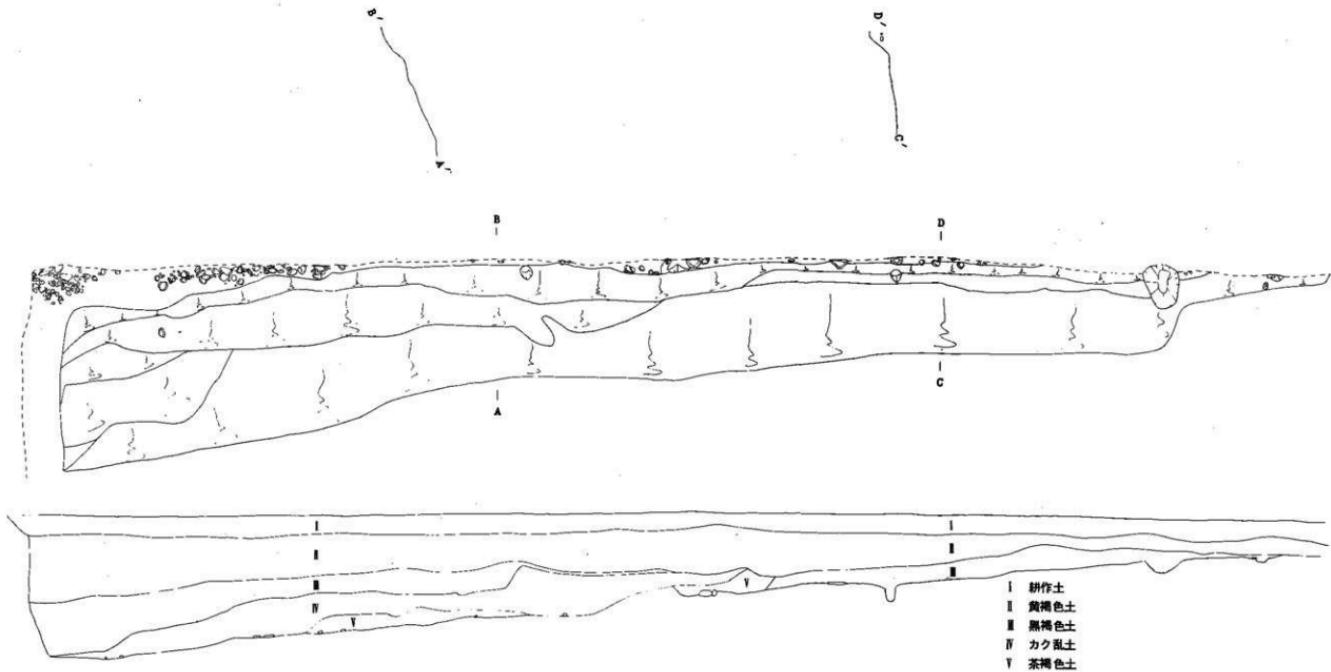
第26図 磯経塙(1:30)



P 23 堀（北側より写す）



P 24 堀（南側より写す）



第27図 堤 (1:80)

## 第Ⅲ章 まとめ

岩間城は、木曾山脈南駒ヶ岳に源を発する与田切川が形成した扇状地を、南駒ヶ岳の前山である横根山より流れで本沢川とその南の小河川が浸透して作った小段丘を利用して作った城館址である。

この岩間城と言わわれている城は、尊卑分派によれば、下伊那郡松川町上片桐の船山城主片桐源八の三男片桐二郎太夫寿綱（信州岩間・飯島氏の祖）とある岩間氏は飯島氏と同様飯島の地に住し地方豪族として勢力を張っていたのである。この岩間城と言わわれている城址は昭和41年の開拓のおり、堀が埋められた。現在は埋られた堀の位置と段丘上に土塁と思われる土手が僅に往時をしのばせている。この城の付近には、城・垣外・小丸・大丸・薬師堀・東谷寺等城と城主に關係があると思われる地名がこっている。今回の調査では埋立てられた堀を発掘して、その構造を調べ性格を確認することが目的であった。この堀は東半分が民家敷地となり柵場整備の除外地区のため、西半分の調査となってしまった。調査の結果、堀は本沢川から羽生悦夫氏宅の物置の西側までは北に傾斜して築造されていることを確認した。この堀の切れる個所が主郭部か、主郭外かは不明であるが一応の出入口と考えられるので、その延長の南の道路下の水田にトレントをいれて調べてみたが、堀が南の古い河川までは続いていないことが確認された。このことは、北側の堀がおそらく、堀の終った物置より東の方向に掘られているのではないかと推測される。もしそうだとするならば、主郭部は、現在民家の屋敷地内と言うことになる。

調査した結果、堀は西側に中段をもつ  という形の堀となる。この様な中段を有する「ヤエン」堀は鎌倉～南北朝時代にその例を見る。

堀の底部は実測図で見られるように多くの自然石が落込んだ状態で発見された。この石の間にヨウの薄く施された灰釉陶器片・内耳等が出土した。また、推積土中より鉄釉陶片・擂鉢の底部・天目茶碗の破片等南北朝～室町時代の遺物が検出された。これ等の事実から本城址は鎌倉末に築造され、室町時代～戦国時代まで存続したことが考えられる。

1号址は、壁内に柱穴と考えられるピットが認められることと、壁外にも壁穴に關係をもつと考えられる柱穴址が発見されているところより、壁外柱をもつ貯藏施設ではないかと考えられる。これらの例は、上伊那郡下では、宮田村下の段の居館址（鎌倉初期～）伊那市西春近荒城、飯島町木郷南羽場（飯島氏居館）等に類例を見ることができる。遺物は、天目茶碗・（室町時代）大龍通宝（北宋1107）・新しくは永樂通宝（1587）などが発見されている。

2号址も同様の壁穴であって、出土遺物から1号址と同時期のものと考えられる。

3号址は、1・2号址とは異なり円形の壁穴址である。遺物は擂鉢の破片・内耳鉢破片いずれも室町期のものである。その外に西方の羽生春美氏宅の物置を建てる際1号址と同様の壁穴が発見されている。この様な事例は城郭の性格を知る上に貴重な資料となるであろう。

ピット群、壁穴をとりまく位置に多くのピットが検出されたが、規則性がないので、獨立建築址としても、どのような性格をもっているのか問題が多い。こうした柱穴と考えられるピット群は、宮田村下の段の城址、木郷南羽場居館址、伊那市西春近荒城からも発見されている。このようなピット群は城郭の建物を研究する上貴重な資料となろう。

4号址。出土遺物より鎌文中期初頭（梨久保式併行）期の住居址。

5号址。出土遺物より鎌文中期初頭（梨久保式併行）期の住居址。住居址の中央に埋籠炉が検出さ

れた住居址である。

9号住居址。大部分が用地区外にあるため、住居址の一部が調査された住居址である。遺物は中期初頭（梨久保併行）と思われるが、諸磯Cの土器片も共伴している。

8号住居址、曾利Ⅱ式に比定される住居址である。

弥生時代の住居址。

第4号住居址。第5号住居址により切られている住居址である。遺物よりみて弥生後期前半、座光寺原式に比定される住居址である。

第7号住居址。埋葬炉をもつ弥生時代後期前半座光寺原式に比定される住居址である。

平安時代の住居址。

10号・11号住居址。遺物が少量しか発見されないので時期を判定することはできないが、おそらく国分寺の住居址ではなかろうか。

碑經塚。岩間城の北の扇状地端、現在水田の土手に経塚の一部が残っており、圃場整備事業のため調査を行った。その結果碑經塚であることが確認できた。石に書れた經文から法華經らしきことがわかった。現在資料不足のため時代を決めるにいたらない。

五輪塔。この五輪塔は、碑經塚の附近、五輪田と云う場所から発見されたと伝えられているもので、現在個人の墓地に移されている。調査の結果関西風の様式をもつ鎌倉末期の五輪とされている。おそらく岩間氏と関係をもつものであろう。

岩間城は、今回の調査の結果、城館の他に經文前期・中期・弥生後期・平安時代の複合遺跡であることが新たに確認された。このことは特筆すべき事項での一つであると思ふ。

今回の調査で岩間城の全貌を明らかにするにいたらなかったが、調査期間の許す限りにおいての発掘ができたことは、地元の皆さん方、教育委員会、南信土地改良事務所、飯島町等の関係の皆様の温い御支援の賜と深く感謝申し上げる次第であります。

（調査団長 友野良一）

岩間上山・岩間城

-緊急発掘調査報告-

昭和55年8月20日 印刷

昭和55年3月26日 発行

発行所 長野県上伊那郡飯島町  
南信土地改良事務所

印刷所 藤原印刷株式会社  
松本市新橋7-21  
電0268(88)5092(代)

